

はんしょうてんわう
反正天皇、

りちうてい どうぼてい
履中帝の同母弟にして、

あはぢのみや うま
淡路宮に生る。

うま へんし
生れて駢齒なり。

みづのゐ く よく そな
瑞井を汲みて浴に具ふ。

とき たちひのはな せいちう へうらく
時に多遅花、井中に飄落す。

よつ てんわう なづ
因て天皇を名けて

たちひのみづはわけのみこ い
多遅比瑞齒別皇子と曰ふ。

にんとくてい
仁徳帝、

すなは たぢひべ しょこく お
乃ち多治部を諸國に置きて、

たうもく いふ
湯沐の邑となす。

たちひ いま いたどり
多遅は今の虎杖なり。

ちやう およ
長ずるに及びて、

ようしうるは みのたけ
容姿美しく、身長九尺二寸五分。

はじ りちうてい たいし
初め履中帝の太子たるや、

すみのえのなかつみこ らん さ
住吉仲皇子の亂を避けて、

いそのかみふるのかみのみや とま
石上振神宮に駐る。

天皇、之を聞き、
迹ねて造る。

履中帝、
意に疑ひて見ず。

天皇、

人をして奏せしめて曰く、

僕、黒心なし。

唯太子の在らざるを

憂れふるが故に

來り赴きしのみと。

履中帝、告げしめて曰く、

我、仲皇子の難を避け、

以て此に至れり。

豈に汝を疑はざるを得ん。

汝、誠に黒心なくば、

難波に還りて

仲皇子を殺せと。

天皇、敬して曰く、
太子、

何の憂ふることか

之あらん。

今仲皇子無道にして、

群臣百姓、

共に之を怨悪し、

左右皆離心あり、

之が為に謀る者なし。

臣、

其の逆を知ると雖も、

未だ太子の命を

受けざるを以て、

徒に自ら慷慨するのみ。

今已に命を奉ぜり。

何ぞ之を

誅することを難からん。

唯恐らくは、
ことたひらのち
事平ぐの後、
なおかうたが
猶且つ疑はれんことを。
ねが
願はくは、
ちぢうちよくもの
忠直の者一人を得て
ともとも
興に俱にせんと。
てい
帝、
へぐりのつくのすくね
平群木兔宿禰を
つか
遣はして往かしむ。
てんわうたん
天皇、歎じて曰く、
いまたいしなかつみこ
今太子も仲皇子も、
みなわあに
皆我が兄なり。
たれしたが
誰にか従ひ
たれそむ
誰にか乖かん。
しかぶだうのぞ
然れども無道を除き
いうだう
有道に就かば、
それたれわれひ
其誰か我を非なりとせんと。

すなは なには 乃ち難波に至り、
いた

なかつみこ きんじふ 仲皇子の近習

さしひ れ いざなひ 刺領巾を誘ひて曰く、
いは

わ ため わうじ 我が爲に皇子を殺せ。
ころ

われかなら あつ 我必ず厚く

なんじ むく 汝に報いんと。
すなは

すなは きん いこん 乃ち錦衣禪を脱して

これ あた 之に興ふ。
さしひ

刺領布、

つひ なかつみこ 遂に仲皇子を刺して

これ ころ 之を殺す。

てんわう つ く 天皇、木兔の言を用いて、

さしひ れ ちう 刺領布を誅し。

そくじつ そくじつ 即日、

やまと おもむ 倭に赴き、

やはん やはん 夜半、

いそのかみ いた 石上に至りて復命す。

ふくめい ふくめい

履中帝、

召し見て、

之を褒寵し、

村合屯倉を賜ふ。

履中帝即位の明年、

立ちて皇太子となる。

六年三月、

履中帝崩ず。

十月四日壬子、

履中天皇を葬る。

元年丙午、

春正月二日戊寅、

天皇、位に即く。

是を瑞齒別天皇となす。

秋八月六日己酉、

津野媛を立て、

皇夫人となす。

冬十月、
都を河内の丹比に遷す。
是を柴籬宮と謂ふ。

五年庚戌、

春正月二十三日丙午。

天皇、

正寢に崩す。

百舌鳥耳原陵に葬る。

在位の間、

風雨時に順ひ、

五穀成熟し、

人民富饒にして

海内無事なりき。

追諡して反正天皇と云ふ。